

# フトモズク養殖技術研究

## ■ 昭紀

本県沿岸でのフトモズクの養殖種としての可能性を検討するため、養殖技術開発試験を行った。

### 材料と方法

平成9年7月に、単子嚢を持った鳴門産フトモズクから遊走子を本県で行われているワカメの単種培養法に準じて採取した。採取した遊走子を培養し、盤状体から初期の胞子体まで成長させた後、23℃、14時間明期(1000~1500lux)で保存した。

平成10年12月10日から平成11年1月27日まで、保存しておいたフリーのフトモズク胞子体の拡大培養を行った。培養条件は、20℃、3000lux、14時間暗期で塩分濃度25psuのPESI培地中通気培養を行った。培地交換は2週間に1回行った。

拡大培養後、約50mlになったフリー胞子体を細断し、100l透明水槽中に塩分濃度25psuの培地を満たした中に養殖網(1.8×20m)1枚と一緒に入れた。水槽は、室温23℃、8000lux、13時間暗期の恒温室内に置き、通気した。培地は、市販ノリ糸状体培養培地にKIを加えて作成した。養殖網は3月9日まで水槽に入れて置いた。途中、培地の交換は行わなかった。2月の中旬に、恒温室の温度を15℃に下げた。3月9日に、養殖網を播磨灘にある養殖施設に移し、試験養殖を開始した。

### 結果及び考察

鳴門産フトモズクについての生活史は調査されておらず、遊走子採取後の保存中のフトモズクがどのステージであるのかは不明であった。しかし、遊走子採取後の培養1ヶ月後には直立同化系及び盤状体が見られたので胞子体であろうと推定された。今回は、短日条件、高温、低塩分条件下で培養することにより、胞子体が中性遊走子嚢を持ち、それから枚出される中性遊走子を採苗できたものと考えられた。しかし、通常、中性遊走子の放出量は少ないとされており、今回は1月27日から3月9日まで長期間採苗したため成功したのではないかと考えられた。

3月9日からは、北泊漁協の協力を得て、漁協養殖セットに養殖網を張り込んだ。養殖水深は0.5~1.0mと比較的浅くした。フトモズク藻体が肉眼視され始めたのは5月に入ってからであり、その間、アオノリ、セイヨウハバノリなどの雑草が成長するので、それを取り除いてやるなどの手入れが必要であった。

今後、鳴門海域でフトモズクの養殖が可能となれば、過剰生産気味であるワカメの転換養殖種となることが期待される。

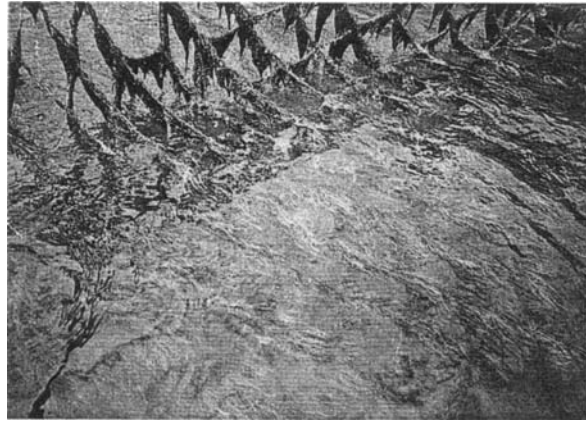


図1 試験養殖中のフトモズク